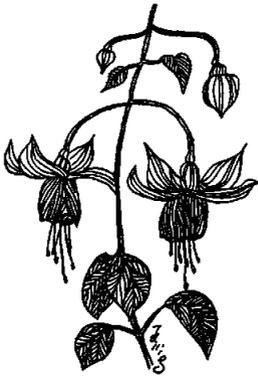


# 自然保護か カラー・テレビか

小林 三 樹



野鳥がさえずる春、トンボが飛びかう秋、川には小魚が楽しげに群遊し、子供らは水遊びに夢中である。いま、この風情が一刻と失われつつあるのに、それを惜しむのは単なる郷愁でしかないのだろうか。

自然保護が人間、または人間性それ自体のためにも不可欠であるとの国民的合意を得るにいたらず、その要求がセンチメンタリズムとか自然謳歌主義の懐古趣味だとして事実上、一蹴せられようとしている。国の、国民の生産性向上、利潤追求、さらに物質的生活水準向上への欲求の前に、自然保護の価値は随所で間われ、試練にさらされている。経済成長にとくに価値が認められているわが国において、つぎの世代に自然を残し得るか否かの責任の大半は、われわれの立居ふるまいにゆだねられている。

農薬——それはこの狭い国土で一億の民に食糧の確保を可能ならしめ、農民にはゆとりをもたらした。その代償として、蛙、蚩、源五郎、以下自然の生物サイクルは乱され、回復は見込めそうもない。木材と紙の消費は、樹木の成長量を越えた伐採をなさせ森林は減りつつある。さらに原生林の人工林への更新は、野鳥の種類をいぢるしく減らしている。石油化学コンビナートのみならず、紙も衣服もプラスチックも金属もその生産は現状では河海の汚濁につ

ながっている。われわれが再び原始生活に戻る覚悟があるのならば一切の生産停止もできよう。しかし、それは不可能なのだ。どうしても妥協点を見出さねばならない。

日本の産業は、多分に人間を粗末にする。ことよって成長してきたといえる。明治以来、富国強兵のためには劣悪労働条件により人間を消耗して富を蓄積し、戦後は公害の無視により、自然環境をつぶして財貨に替えてきたからである。一方(富の分配上の問題は残るにしても)、人間とその環境を軽視したからこそこの生活水準が得られ、曲りなりにも社会福祉に手の回る国力に達したとの説もまったく否定はなしえない。しかし、過去は過去としこの水準に達した段階で将来を見ると、経済成長(物質的富の獲得)と自然保護のどちらを優先するのか、換言すると、妥当な妥協点をどのへんに見出し出すかについて深く考えなければならぬ。

卑近な例を用いさせていたくだらなければ、その一、水泳プールの建設費の方が、河海に放流する廃液の処理費よりも安いとしよう。廃液放流はつづけられ、泳ぎ場を失った子供達は、工場が補償として建設したプールで、安全に季節を問わずに水泳をなしうるようになった。工場は廃液を処理するよりも遙かに安い金で非難をのがれ、下流

沿岸の子供達は便利さを得た。河川を清澄に保つことよりも、地域全体ではじいた出費は少なく、大変に経済的解決であった。このことは一体、進歩なのか、やむを得ぬ帰結なのか、退歩なのか。

その二、工場の廃液処理費よりも下流漁民の漁獲粗収入が少ない場合に、工場は漁民に補償金を支払い漁業権を買収し転業させれば、以後その水面は自由使用しうる。海浜散歩者、風景観賞者、水泳者、釣り人その他、その時点で権利を設定していない者はすべて無視され、その水面はあたかも私有物かのごとくなる。地元行政体や住民も、河海が清くなっても一文にもならぬゆえ、税収が増し、給与が増し、補償金を得ることを望む。自然保護に価値を見い出せようにはあまりに酷な生活を強いられる人々のいる場合もふくめて、これをいかに考えるべきか。

その三、寒冷地農業としての馬鈴薯、甜菜の現金化にはそれを商品(澱粉、ビート糖)に転換せざるを得ず、その工程で大量の廃液生成が避けられない。収穫期以後、数箇月間のみ短期操業ゆえ、廃液処理設備に投じうる費用には限界がある(馬鈴薯、甜菜の長期貯蔵の研究はこの限界の緩和をもたらず)。コーンスターチと砂糖の輸入価格にくらべて国内価格は多少保護さ

れているものの、廃液処理費の増高は農民の減収に通ずる。会社のみならず農民さえもが、川の保清より増収を願っている。パルプ化以外に用途のない雑木を抱えている林産家も、同じ意識と考えられる。川は汚濁し生物相は破壊され、鮭鱒は疲労を増しながらもその本能ゆえに遡河している。人間の得るお金ゆえに。これらのことをどのように考えたらいのか。いまはその決断を迫られているときのようなのである。

北海道に重化学コンビナートは無かったし、また東京、名古屋、大阪にみるような湾奥沖積低地に感潮河川を挟んで都市・工場が立地するというような汚濁の深刻化し易い状況は、本道には存在しなかった。したがって北海道の水汚染に関してはまた甚しい公害は経験されていなく、ほとんどが私害であった。加害者が散在しているためもある。汚濁源を明確に限定しうるからである。さらに北海道の特徴として、加害企業は地元生産品の加工を業とするがゆえに農林に生活基盤を置く住民と利益をともにするという性格、人口分布の疎なるゆえに河川汚濁が深刻な被害に結びつかない例が多いという性格、開拓地として資源を収奪し枯渇させた後は、荒廃のままに残して他へ移動するという形態が存したという性格、などをあげられる。これらの特徴と住

民の経済水準の貧しさは、東海道メカロボリス圏内の住民にくらべて、本道住民の公害に立向う姿勢を未熟なままにしている。

昨今、苦小牧ほかへのコンビナート進出が着実に準備されつつある。それは従来の全道的に散在し、住民と利をともにする工場とは異り、海浜に集中立地し、地元住民の収入に直接の関係をもち、もし大気汚染・水質汚濁を生ずるとすれば、害のみを地域住民にもたらす。そのような意味で、道民の経験しなかつた異質な状況が持ち込まれようとしている。いまや道民ひとりひとりに、自然に囲まれた貧乏か、自然を売渡してカラーテレビを買うか、中間に妥協点を見い出すかの選択を迫られている。人をふくめた動植物にまだまだ深い意味を持っている美しき秩序ある自然の価値について、いろいろな立場の人々の間で評価の一致を得られることがぜひとも必要である。

アポロ11号の成功、それは一九世紀末以来の勝利であった。システム技術とは、複雑にからみ合い、お互いに矛盾、対立、代替、補充、因果などの複雑な関係にある諸要素の膨大な集合を解析し、特定の目標に対し、その集合体の機能を「最適化」するように統合し、組織し、運営・管理する技術である（朝日新聞）。それには多情報の

中から特定のものを選択する行為と、それを目指して統合する行為を伴うから、システム技術は本質的にある種の倫理観、価値観を前提としている。工場や都市の立地と公害の問題は、いまやシステムの問題として扱う以外には解決へのアプローチが見い出されなくなっている。

それはある集合体（石狩川流域なり北海道なり国全体）内の諸要素の利害をすべて経済財に換算し、集合体全体として最適化（収支合計が最高値になるように）する組合せを求めて行動することである。先に例示した「汚濁に目をつぶりプールで泳ぐこと」もその最適化の所産であった。システム化には、そのシステムの目標を何に置くかによって、情報の選択と統合の基準を異にする。アポロ11号システムでは任務遂行の確実性が、交通システムでは輸送量の極大化が目標であろう。地域計画・公害システムでは福祉最大もしくは費用最小が目標とされている。

そこではすべての価値は金銭に換算可能であり、金銭的利益をもたらさぬものは無価値であるとの前提に立つ。宗教や茶道や芸術に価値を認めてきたわが国民が、簡単にこの前提を全面的に受け入れようとは思われない。しかし現実のダム、浄水場、下水処理場などの社会資本投下、水源林管

理、工場や鉱山の立地と廃棄物処分などの組合せにおいて、ある流域なり地域なりを集合体として調整・統合するには、費用最小化を目標としたシステムの最適化以外に適切なものが見出されていない。したがって比較的換算の容易な釣り・水泳行為のほかに、大自然の与える恵みとして、大自然と生物への畏敬の念とか大自然と人間との関係の認識、豊かな人間性の回復、情緒への影響、本来の生物サイクルの保持、等々の価値をどのように評価するかという意味で、システム内における自然保護の価値観、倫理観の決定をひとりひとりに迫られているのである。

その決定が遅れ、さらに汚濁機構や水処理についての科学的究明が遅れば遅れるほど、環境基準と地域計画は政治的・経済的勢力関係によって、ひとにぎりの人達の当面の利益が重視されて決定され、自然がねじふせられて行ってしまうであろう。

公害の問題は資本主義体制とまったく切り離して論ずることはできないけれどもそれには触れずに、羨望してきた自分だけの物欲を満たすことに価値を認め、精神的文化的に空ろにならんとしている時勢にあつて、自然を守ることに意義についてのコンセンサスの醸成を願った次第である。